

イーリアスにおけるアスペクトに関する一考察 —— 比喩表現に見出される直説法アオリストについて ——

竹 島 俊 之

古代ギリシア語では時間関係は専ら直説法においてのみ表現され、それ以外の法、たとえば接続法、希求法などでは主としてアスペクトの区別のみが行われている。

しかしながら、比喩表現では直説法が使われている場合でもそうした時間概念が再び解消され、アスペクトの面だけが浮き彫りにされてくると考えられる。

eūt' oreos koruphēisi Nōtos katekhēuen (aor) omíklēn
poimēsín ou ti philēn, kléptēi dé te nuktōs amēinō,
tōsson tīs t' epileússei (pr), hōson t' epì lāan hīēsín (pr)
hōs ara tōn hupō possi konísalos ōrnut' aellēs ■ 10 – 13

「さながら山の峰々へかけ、東南風がもやを一面に注ぎかけるよう。牧人達にはまったくありがたい。だが盗賊には夜より都合がいいもの。そして石を投げて届くくらいしか、見通しがきかない。それほどひどく軍勢の足もとから、砂煙が空へと舞い上った。」

この研究発表で目指そうとするのは、比喩表現において特に異様な印象を与える直説法アオリストについて、それが使用されている条件を記述し、それを糸口としてギリシア語のアスペクトを考察していくとうとするものである。

比喩文を先ず(1)ēuteの型、(2)hōs dē, hōs tēの型、(3)hōs te + 名詞 + 関係代名詞の型、(4)hōs hōteの型に分類し、それぞれの型の中で、個々の動詞を検討していく。

(1)の型は上述の例以外にⅡ 455 – 456, Ⅱ 467 – 471, XV 618 – 621に見出されるが、Ⅱ 10の katekhēuen 以外はすべて直説法現在である。この katekhēuen というアオリスト形式は(3)の型でもⅢ 156に見出される。この型ではそれ以外に接続法現在、接続法アオリスト、直説法現在が見出される。そしてⅢ 305 – 306に見出されるアオリスト形式は典型的状況を述べる場合の直説法アオリスト、即ち現在形で、あるいは未来形で与えられる前提に直接続いて起こる事柄を述べる形式で、しばしば現在形で、あるいは未来形で翻訳することのできるきわめてギリシア語に特徴的なアオリストの用法の一つと見なすことができる。

このように整理した場合、比喩表現における katekhēuen という形式は katakhein という動詞概念とアオリストというアスペクト範疇がきわめて緊密に結びついているためとあるいは考えることができる

かもしれない。

E. Schwyzer : Griechische Grammatik II 281 — 286 に詳述されている理論に即しつつ、きわめて多くの問題性をはらんでいる比喩表現における直説法アオリストの用法について、作品全体を見渡しつつ、再検討して行きたい。